

血液培養から *Ochrobactrum intermedium* を検出した一症例

◎浦嶋 翔大¹⁾、小川 沙希恵¹⁾、牟田 正一¹⁾
独立行政法人 国立病院機構 九州がんセンター¹⁾

【はじめに】*Ochrobactrum* 属はブドウ糖非発酵の好気性グラム陰性桿菌で、環境中の他、ヒトの腸管内にも生息しており、主に日和見感染症が報告されている。今回、血液培養から *Ochrobactrum intermedium* を検出したので報告する。

【症例】50歳代男性。残胃癌・リンパ節転移・肝転移のため当院で治療中であった。腹膜播種増悪により閉塞性黄疸あり、治療を行っていた。20XX年、CT検査でリンパ節転移・腹膜播種の増大が確認され、入院となった。治療を行ったが黄疸の改善なく、1か月後、胆管内にステント留置を行った。その朝の採血では、CRP11.04 mg/dLと高値であった。その後、夜に38.0℃の発熱があり、血液培養を2セット採取し、SBT/CPZを2g/日で開始した。翌朝37.1℃まで解熱した。胆管炎と考えられ、1週間SBT/CPZを使用し、その後は発熱なく経過し、CRPも次第に下降した。その後黄疸はやや改善し一時的に体調も改善したが、腹膜播種の進行があり、徐々に衰弱し18日後に死亡となった。

【微生物学的検査】血液培養提出後、29時間後に2セットの好気ボトルからグラム陰性桿菌が検出された。羊血液寒天培地にて36℃炭酸ガス培養、マッコンキー寒天培地にて36℃好気培養を行った。培養1日目で前者に白色のムコイド状コロニーが、後者に透明のムコイド状コロニーが発育した。オキシダーゼ試験は陽性であった。菌種同定にはVITEK2のGNカードを使用した。

【結果】*Ochrobactrum anthropi*と同定されたが、生化学的性状のみでは正しく同定できない可能性があるためと判断したため、質量分析での同定を実施した結果、*O.intermedium*と同定された。

【考察】本菌は生化学的性状では*O.anthropi*などと誤同定されるか、*Ochrobactrum sp.*と同定され菌種の同定には至らないことが報告されている。そのため本菌が疑われる場合は、遺伝子検査、もしくは質量分析を行うことが重要であると考えられる。

(代表 092-541-3231 内線 2263)